

地域連携をめざした外国人児童生徒のための JSL 対話型アセスメント研修

—研修参加者のアンケート結果からの考察—

小川佳子（大阪市立 中学校）・樋口尊子（大阪樟蔭女子大学）・藤井みゆき（大阪大学）

1. 東大阪市における課題と実践の目的

筆者らは、東大阪市において地域研究助成金の交付を受け「日本語指導支援員による日本語能力判定(DLA 等のアセスメント)をもとにした日本語指導の在り方」と題した取り組みを行った。これは、行政(教育委員会)と学校教育(小学校)と日本語教育(大学)の連携による、地域における新たな日本語支援体制の構築を目標としている。東大阪市には日本語指導が必要な児童生徒(以下、「児童生徒」)が500人ほど点在しており約20名の加配教員が指導にあっている。しかし、加配教員は日本語教育の専門的知識はなく、効果的な指導方法やその指標となるアセスメントを学ぶ機会が必要である。そこで、日本語教育の知識を有する者(以下、「日本語協力者」)が現場に入り連携する体制構築をめざし、以下の取り組みを1年間にわたって行った。①日本語協力者の募集及びJSL対話型アセスメント(以下、「DLA」)研修の実施 ②日本語協力者によるDLAの実施及び学校教員(加配教員含む)との協議の実施 ③日本語協力者がDLA結果に基づき活動案を作成 ④日本語協力者を対象にした活動案再考のための意見交換会実施 ⑤学校教員が活動案を実践 ⑥全関係者による活動案の実践報告会を開催 ⑦修正した活動案をまとめ、本取り組みの報告書を作成し、市内の全学校に配布。

本発表では、この取り組み後に日本語協力者に対して行ったアンケートをもとに考察し、その妥当性や改善点を提示する。

2. 実践の内容

2.1 ①日本語協力者の募集及びDLA研修の実施

- (1) 実施時期：2023年4月に日本語協力者を募集し、DLA研修を5月～8月に行った。
- (2) 日本語協力者：10名（内訳は、大学や大学院で日本語教員養成課程を学ぶ学生2名、日本語学校教員経験者7名、NPO団体の日本語支援者1名。うち、児童生徒の日本語指導経験者は3名で、DLA経験有りは2名であった。）
- (3) DLA研修：全5回（1回90分）。児童生徒に対する支援のために、まずは児童の現状の力を把握する必要があり、東大阪市教育委員会はその必要性を把握する指標としてDLAを採用している。日本語協力者10名の半数以上はDLAや児童生徒の日本語指導の知識や経験を有しないため、子どもの日本語教育及びDLAについての理解を目的とし研修を企画した。対面での研修に出席できない者に対して、後日同じ内容でオンライン研修も実施した。

表1. DLA研修の日時、内容について

	開催日	内容
第1回	2023年5月15日	教育委員会による日本語指導の現状報告、子どもの日本語教育について、WS:成人と児童生徒への日本語指導の違いを考える
第2回	2023年6月12日	DLAの概要説明、WS:子どもの課題と日本語授業の目標と授業活動を考える
第3回	2023年7月10日	DLAのやり方の確認及び練習、WS:子どもの特徴を考え、活動案を考える

第 4 回	2023 年 8 月 10 日	DLA の評価と実施する際の留意点、WS: DLA 「話す・読む」の発話データによる評価実践
第 5 回	2023 年 8 月 28 日	DLA 実施スケジュール・個人情報取り扱い等留意点の確認、児童生徒の力を伸ばす日本語指導 (活動) 案の例の紹介

2.2 ②～⑦の実践

DLA は、教育委員会の呼びかけに応じた小学校 6 校 11 名の児童に対して行った。実施後、日本語協力者の活動案作成に向けて、学校教員との協議や、日本語協力者間での意見交換会を設けた。できあがった活動案は学校教員が実践し、その内容を実践報告会にて報告してもらった。さらに日本語協力者が活動案を修正し、筆者らが報告書にまとめ、市内の全学校に配布した。

3. 日本語協力者へのアンケートからの実践の振り返り

これらの実践を振り返るため、日本語協力者 10 名に対し 2024 年 3 月にアンケートを行った。質問項目は、研修の内容の理解と満足度、DLA の実施、取り組み全体、今後について等である。

3.1 DLA 研修及び DLA 実施について

研修の内容について、第 1 回から第 4 回までのそれぞれの理解度について「十分理解できた」「概ね理解できた」「あまり理解できなかった」「理解できなかった」で回答を求めた。その結果、第 4 回の DLA の評価方法を 1 名が「あまり理解できなかった」と解答したが、他の各項目においては「十分理解できた」「概ね理解できた」のいずれかであった。一方で、DLA の実施については「あまりうまくできなかった」が 5 名で、「子どもの発話を引き出すのが難しい」「評価に迷った」等の意見が散見された。子どもと接する機会があまりないため評価することが難しいとの意見があった。研修では評価について、より丁寧な説明を、やり方については具体的な方法の理解を促す工夫をする必要があっただろう。

3.2 活動案作成から実践報告会までについて

活動案の作成については、「子ども向けということで戸惑いはあった」という意見があったが、「イラストを多めにしたり、選択カードを作った」というような工夫や「作成にあたっては楽しかった」という意見もあった。また、「アイディアはあるが自分の中でまとまらず苦労したが、他の方の意見やアドバイスをもらったのがよかった」との意見があった。意見交換会、実践報告会については、どちらもアンケート回答者全員が「活動案の再考に役立った」と答えている。実践報告会では、日本語協力者のアイディアの活動案が、学校教員により現状に合わせて実践された報告があり、両者の経験と知識が融合された活動案に最終的になった。

3.3 取り組み全体と、今後について

この取り組みについては、「今まで留学生の日本語教育を行ってきたので、違う視点での日本語教育を知ることは大きな発見であった」等、児童生徒に対する日本語教育について学べたことを評価するとともに、小学校教員と協議の中で互いの知識の違いにより「相乗効果があった」等の意見も見られた。また、「今後子どもの日本語教育に携わっていききたいか」という質問には、8 名が「はい」と答え、今後の継続的な支援につながることを期待された。

一年にわたる取り組みを終えて、翌 2024 年度から日本語指導支援員が学校や加配教員に対し、指導方法の立案、助言、DLA 等の支援を行う体制が設けられた。2024 年度は 9 校から申し出があり、日本語協力者 4 名が学校や加配教員に支援にあたっている。本取り組みで行ったことにより構築できた連携が継続され、子どもたちへ還元されることを期待する。